

羞恥心と太陽

一九八五年の夏に初めて旅行で中国を訪れたときに驚いた光景の一つは、自転車に乗っている女性がハンドルを握る両手でロングスカートの裾をつかんで走っている姿だった。こうすると前方からの風がスカートの中に入って気持ちよさそうではある。だが、この姿ではスカートの裾は大きく翻り、中が見えてしまう。そうした格好で自転車に乗る女性をこの旅行中に何人も目撃したのである。

それは真夏の北京でのことで、最高気温は三五度ぐらいだったかもしれない。一九八五年といえば中国の改革開

放政策が始まってからまだそれほど年数が経っておらず、人々の生活は貧しかった。服もそれほど多く持っていない。ズボンやスカートといったものがなかった。なのでやむなくロングスカートを穿いていたのだと想像する。改革開放以前は女性たちも人民服のズボンを穿いていたはずである。女性たちはスカートの中に風を取り入れて疾走できる時代の到来に解放感を感じているようなふうにも見えた。それにしてもスカートが翻って下着が見えてしまう状況を自ら作り出しているのには驚いた。

丸川知雄

もっとも、その時は一ヶ月間中国各地を旅行していて、中国では人々が下着が人目にさらされることに対して無頓着であることに気づいていた。例えば長距離列車のなかではおそらく車内で洗濯したものと思われる女性用のパンツが窓枠に干してあるのを何度も見た。ちなみにそのパンツは日本ではトランクスと呼ばれている柄物で大ぶりの男性用パンツのようなものであった。翻って日本に戻ってみると、女性たちは電車で腰掛けるようなときにスカートのなかを見られないように足を硬く閉じている。自由が制約されている

ように見られている社会主義中国のほ

うが、こと女性の足さばきに関してより自由であると思った。日本には女性のスカートの中を覗くことに喜びを見いだす男たちがいる。ではそうした男たちが喜び勇んで中国へ出かけていったかといえば、そんな話は聞いたことがない。おそらくそうした男たちは下着そのものよりも、それを着ている女性が羞恥心を感じている状況下で見ることがうれしいのだと思われる。だから、北京の女性たちのように下着が見えることに何も羞恥心を感じていないと喜びも湧いてこないのだろう。ならば日本の女性たちも羞恥心を捨て、中国の女性たちのような自由な足さばきをすればかえってそれを覗こうとする男たちを抑止できるはずである。ただ、これは理論的には正しいかもしれないが実践的にはほとんど意味のない提言である。なぜなら羞恥心は自分で思うようにコントロールできるような

感情ではないからだ。

社会心理学者の菅原健介氏によれば、羞恥心とは人間が社会から排斥されないようにするために自分の行動の中に排斥されるような要素がないかを監視して警告を発するシステムであるという（菅原健介『羞恥心はどこへ消えた？』光文社新書、二〇〇五年）。日本社会に生きる人が日本ではしたくないと見なされている行為について自由に羞恥心のスイッチを切るようなことはできないのだ。

ただ、これが様々な社会から来た人々が行き交うような場面だと、羞恥心を感じるポイントが人によって異なることによる摩擦を引き起こす。インドネシアのバリ島のビーチはそうした場であった。オーストラリアやヨーロッパから来た白人の女性たちは上半身に何もまとわない姿で砂浜に寝そべっていた。一方、現地のバリ人はというと、そもそもビーチで遊んでいる人が

いない。たしかに地元の物売りはいるし、遊び人風のバリ人の若い男たちもいて日本人の女性とみると声をかけてくるが、この若い男たちは経済的目的をもって浜にたむろしている。バリ人たちは遊ぶ余裕がないわけではない。

毎日のようにどこかの寺院でお祭りがあり、供物を捧げたり、音楽を奏でたり、夜になればバクチ、とバリ人たちは余暇活動に多大なエネルギーを注いでいる。単にビーチに寝そべったり海で泳ぐことに興味がないだけだろう。

ムスリムの多いジャワ島とは違ってバリ島はヒンズー教徒が多いので女性が肌を見せることに対する禁忌はそれほど厳しくはないが、それにしても女性が上半身裸でいることはバリ人たちにとっては恥ずかしいことであるはずだ。それなのにこのビーチに来る欧米人たちときたら「郷にいれば郷に従う」どころか自分たちの習慣をそのまま持ち込んでいく。地元民の視線など眼中

になく、それは要するに対等な人間として認識していかないということではな

からうか。パリ人にとって観光客は商売の対象だから目くじらを立てたりしないが、自分たちの土地で外国人が我が物顔に振る舞う姿に心中穏やかでないものを感じているのかもしれない。果たしてその懸念は、その一〇年後に、私が座っていたビーチから数百メートルしか離れていない場所にある外国人が多く集まるディスコを狙ったテロという形で具現化してしまった。二〇〇人以上の死者を出したこの事件を起したのはいスラム過激派とされているので、パリ人ではないのかも知れないが、少なくともインドネシア人の一部は自分たちが恥ずかしいと思うことを自分たちの国で平気でする欧米人たちに怒りをたぎらせていたのだ。

その点、同じ東南アジアのビーチでもベトナムのニャチャンはもっと心安らかに海水浴を楽しめる。というのは

そこではベトナム人たちも大勢海水浴を楽しんでいるからである。ベトナム

人の多くは普通の水着姿だったように思うが、印象に残っているのは中高年の女性たちが普段着のまま海水に浸かっていたことである。まさに海水浴で、お風呂のように海のなかでじっとしているだけで、それはそれで楽しそうであった。おそらく水着になるのが恥ずかしいのと、肌を太陽にさらしたくないという両方の理由があるのだろう。

一般に赤道に近い地方に住む人は年がら年中太陽に照りつけられているため、ビーチで日光浴することにほとんど関心を示さないようである。バリ島がそうであったし、スリランカもそうだった。スリランカの西南沿岸は白い砂浜が続き、息をのむような美しさだったが、私が訪れた一九九〇年当時はずっと続く内戦の影響で外国人観光客はほとんどなく、スリランカ人はビーチに全く興味がなく、浜には人っ子一人

いない状態だった。スリランカの農村を車で走っていて印象に残ったのは女性たちによる洗濯と体洗いを兼ねた行水である。サリーを着たままおそらく石けんを体と衣服の間で動かしてゴシゴシやるのであろう。石けんの白い泡が服の外側にも浮かび上がってくるようになる。最後に水をかぶり、あとは照りつける太陽のもとにいれば服も体もそのうちに乾く。そんな行水をしている女性たちの姿が車窓から何度も見えた。家の中に風呂やシャワーがないためだろうが、同時になるべく肌を日光にさらしたくないということもあったのだろう。

一方、長い冬の間、短い日照時間に耐えなければならぬヨーロッパの人たちは短い夏の間にせいっぱい太陽を浴びておこうとビーチでの日光浴に熱心である。ヨーロッパの女性たちがしばしば上半身裸での日光浴も厭わないのも、習慣というよりも、少しでも

多くの日光を体に当てたいという切実な生物学的要求に基づく行動なのかもしれない。どんなことに羞恥心を感じるのかは社会的に決まることなのだろうけれど、気候風土にも影響されている面もあるようである。

ヨーロッパほど日照が貴重であるわけでもない日本はヨーロッパ人ほど日光浴に熱心ではないし、日本人の女性はヨーロッパの海浜に行って「郷にいれば郷に従う」ことには抵抗感があるだろうと思う。だが、約一五〇年前に裸の姿で外国人を驚かせていたのはむしろ日本人の方だった。幕末に日本にやってきたベリーの艦隊は下田にのべ一ヶ月半ほど滞在するが、その時に町中の公衆浴場が男女混浴であることに大変驚いている（中野明『裸はいつから恥ずかしくなったか』新潮社、二〇一〇年）。この他にも数多くの欧米人が幕末に日本を訪れた記録のなかで銭湯での男女混浴について驚きをもって

記している。当時の日本人は往来で生水することも、銭湯で暖まって裸のまま家に帰ることも平気だったらしい。

ところが、開港によって多くの欧米人が日本に来るようになり、日本人も欧米との軍事力、経済、技術の格差を強く意識するにつれ、これまで当たり前だった男女混浴やちゃんまげに対して日本人は欧米人の視線を意識するようになり、たちまち羞恥心を感じるようになった。明治になると政府はすぐに混浴禁止令と断髪令を出した。

この歴史が示唆するのは、羞恥心を感じる基準が異なる人々が接触するとき、どちらの基準が勝つかは結局人々がそれぞれ背負っている社会の強弱によって決まるということである。パリ島で欧米人の女性たちが上半身裸で浜辺を闊歩できるのも結局欧米が強くパリ島が弱いことに起因している。

ちなみに冒頭で述べた北京における女性の自転車の乗り方であるが、それ

を目撃した六年後の一九九一年から二年間私は北京に住んだが、その間にそうした乗り方に遭遇した記憶はない。北京の人々も持っている服の数が格段に多くなったことと、下着が見えてしまふことを北京の女性たちが恥ずかしく思うようになったことが原因だろう。幕末から明治にかけての日本と同様、現代の中国でも羞恥心の境界は急速に移動したのである。

（まるかわ・ともお）

東京大学社会科学研究所教授